
紫式部観察日記

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫式部観察日記

【Nコード】

N7290Q

【作者名】

鈴木真心

【あらすじ】

曖昧適当現代人ノ三宅こまちと、元祖アキバ系ノ紫式部を中心に無理矢理繰り広げられる曖昧適当時代背景まる無視な平安京トリックプロメディ！

何のこつちや。

何のこつちや。

ぽかーんと大口開けて、大通りでへたり込んでるあたしは、べつにどうってことないふつーうの人。

目の前でお齒黒をちらつかせて、おたおたしてるのは（多分）十二単を纏った女の人。

「だ、大丈夫ですか？貴女、き、急に牛車ぎしやの前に現れるものですか……！」

「あー……はあ……」

だから、何のこつちや。

女の人の認識では、急に牛車の前に現れたあたしは、この恐ろしくのつろい車に轢かれたことになってるらしい。

牛が引くような車だよ？

轢かれるわけあるか。

どんだけ鈍臭い奴よ、それ。

「む、紫様！そのような怪しげな者に駆け寄ってはなりませぬ！」

なりませぬってあんた。

「そうですぞ、御廉越^{みす}しならまだしも牛車から降りられるなど!」
「轢いたのですよ!？」

いや、轢かれてないってばさ。

従者らしい奴らと気丈にも言い合いをする彼女をばーっと眺めながら、

何のこっちゃ。

もう一度、そう思った。

あたしはさっきまで、ふつつーうに自宅で晩飯食ってた。
ふつつーうにバラエティで大爆笑して、ふつつーうに風呂入って、
ふつつーうにベッドでごろごろしてた。

で。

うっかり勢いつけ過ぎてベッドから転げ落ちたら、

ここにいた。

パジャマとも言えない上下ストライプのＴシャツにハーフパンツで。
(つまり適当なのを着てた)

「ほら見なさい、怯えて黙ってしまったではないですか！」

女の人で回想から引き戻される。

違うんだけど。

（めんどくさいから言わない）

「うう、どっ？」

取り敢えずわからん。

ベッドから落ちたら大通りで、目の前には牛に御簾付きの黒塗り車に、お齒黒の彼女に従者（らしい）。

「……ああ、記憶を失ってしまったのですね……」

憐れみ満載な彼女をスルーして、もう一度尋ねた。

「で、どっ？」

貧民街か何かか？

道の先には、やたらと煌びやかな家がたくさんあるけど。

「平安京ですよ」

……そうきたか。

「可哀相に……うちで面倒を見ます」

「紫様！」

「お黙りになつて。決めたのですよ」

よくわからんが、決めたらしい。

面倒見てくれるならそりゃあ有り難いことこの上ないので、別に反論しなかった。

（どうでもよかった）

「貴女、お名はおわかり？」

相変わらずな憐れみの目で、あたしに問い掛ける彼女。

いい加減、ちよつとうざいな。

（いろいろ失礼）

「んーまあいつか。あたし三宅こまち。あんたは？」

「わたくしは紫式部と申します」

「……へーえ……」

にやりと笑ったあたしを果たして紫は知ってか知らずか。

こうして。

恐ろしくのっろい車に同乗し、あたしは平安京（らしいところ）で、紫式部（らしい人）と暮らすことになった。

どうしよう。

ちょお面白そう！

何のこっちゃ。(後書き)

本当に時代背景はまる無視です。

そついうものだとご理解ご了承のうえ、お読みください。

数学者になっから。

さて。

只今あたし、紫んちでご厄介中。
(くつろぎまくり)

暇。

ちよお暇。

何だよここ、てかこの時代。

洒落っ気づいて和歌とか読んでんじゃねえよ、和歌とかさあ。
テレビなし、携帯なし、ゲームもなければトイレはぼつとんどころ
の騒ぎでもない。

「うん……」

あたしは考えていた。

どうやって現代に帰還するか、
ではなく、

どうやって現代文明を持ち込んでやるか。
ここをひたすら考えていて、そして、

飽きた。

めんどくさいから、適当に文明持ち込んでやって、適当におちよく
ってやるう。

そう、心に固く誓いを立てた。

（凄く適当で厄介）

「紫！」

「ひゃああああっ！？こまち殿！？」

トイレ（廁と呼ぶとかどうでもいい）に入ってた紫が思いつきりしゃがんでたけど、お付きの奴が着物の裾を持ったまま目ん玉ひん剥いてたけど、そんなんはどうでもよかった。

「あたし、今日から数学者になっから」

「す、すうがく……？」

数学もわからんのか。

どうしょもねえな、平安京。

（それは仕方ない）

ぽかーんとバカみたいに口を開けたままの紫とお付きをそのままに、あたしは颯爽とその場を後にした。

トイレのドア（襖？）は、開けたままで。

「紫さ……ひいいいっ！」

「ひゃああああっ、ま、まだ途中ですよ！」

「も、申し訳ございませぬ！」

バックが騒がしかつたけど、どうしてもよかつたので振り向かなかつた。

数学者ね！。

我ながらあつたまい！。

歴史に名が残つたらどうしよう！

あたし、ちょお淒いじゃん！

「にんがしー、にさんがろくつてか」

九九（二の段）を歌いながら、あたしの足取りはどこまでも軽かつた。

どうでもいいけど、平安京あつちーな。

数学者になつから。(後書き)

別名ノ紫式部おちより日記。

嫌ですよ、僕はミツチエルです。

ここはやたらと小綺麗な一室。

明らかに二十畳以上はあるのかという広々としたそこは、本日もハイテンションだった。

すぱーんっ。

勢いよく開け放たれた襖。

「グッモーニン、磨呂ども！」

「グッモーニン、ミス・こまち！」

ハ―イ、皆、元気？

あたし、ミス・こまち！

うっかりつかうか平安京とかいうふざけたところに来ちゃったみたいだから、うっかり数学者になってみたんだぜ

ヘイ、YO！

（いろいろ間違い）

そんな訳で、あたしの数学塾、大好評！

バカな磨呂どものおかげでか、がっばり儲かってたりする。

ほんと、こいつらってバカでー。

（酷い）

紫の屋敷内に （無理矢理） 作らせた小さな （決して小さくは

ない）塾は、毎日毎日、満員御礼。

「じゃ、今日はー宇宙について教えてやっから！耳の穴かっぽじって、よく聞くんだけ」

「オーケー、トニー！」

バカみたいに、あたしが教えた通りに返事する磨呂ども。

マジ、バツカでー。

「ハイ、師匠！」

「ハイ、ミツチエル。どうした」

なんちゃらのなんちゃら磨呂とか、皆、名前が長ったらしいこの世界。

だから、あたしが適当に付けてやった訳で。

もちろん、逆らう奴には鼻フック決めて泣かしてやったけど。

（かなりな暴拳）

弱いな、平安貴族ご子息一行。

手を挙げたミツチエルを指すと、ハイツと元気よく立ち上がる平安貴族ご子息のミツチエル。

「うちゅうがわかりません、師匠！」

そうきたか。

あたしにだってよくわかんないっつもの。

「宇宙ってのはー漢字でこう！『宇宙』！この世界は丸いの、丸、
円！いーい？世界の果てまで行ったら落ちるとか、バカが言うこと
よ！」

ちやちやつと半紙に書いた地球（只、丸を書いただけ）を皆に
見えるように、高々と掲げる。

おおー……と上がった歓声に、思わず笑いそうだけど。

「でー、うちのいる世界は『地球』っつー星！星＝惑星！惑星は
『宇宙』にあるんだ！」

半紙に筆で、ざざっと書き足していけば、びちゃびちゃと墨が飛び
散った。

あーあー。

ま、いっか。

後で紫に掃除させよう。

（やっぱり酷い）

半紙を回してやれば、興味津々な磨呂どもがそれに群がる。

そして。

「今日の格言！『水金地火木土天海冥』！」

「『すいきんちかもくどつてんかいめい』！（磨呂リピート）」

「おっし！今日はおしまい！シーユ―磨呂ども！」

「シーユ―アゲーン、ミス・こまち！」

すぱーんつと襖を開ければ、そこには、紫が泣き崩れていた。

「何やってんの、紫」

「……お願いですから、公きんだちの殿を集めておかしな講習会はおやめく
ださい、こまち殿……！」

またも泣き崩れた紫をほったらかしたまま、あたしは鼻歌混じりに、
颯爽とその場を後にした。

やべえ、平安京ちよおおもういじゃん！

「あ、紫殿」

「あ、これはこれは坂田殿のご子息殿で……ひiiiiいっ！？顔に、
顔に墨が！」

「嫌ですよ、僕はミツチエルです、紫殿」

「ミツチエル！？ミツチエルって何のことでしょうか！？こまち殿、こまち殿ー！？」

紫の叫びは、あたしには届かなかった。

敵襲ですか!?

本日、快晴なり。

「つまんねえなあ」

そう、あたしはすごぶるつまらなかった。

今日は塾もお休み。

(自分の都合で勝手に休みにする)

だから、やることがない。

紫で遊ぼうと思って歩いていたら、どうやら今日は、お琴発表会
(?) らしかった。

縁側に座って足をぶらぶらさせてれば、どこからともなく足音が近づいてくる。

「師匠!」

振り向けばミッチェル。

ああ、そんなドラマ、昔やってなかったっけ。

「師匠も琴おやりになるんですか?」

嬉々として隣に座ったミツチエルに、煙管片手にあたしは答えた。

「やんないよあんなの。向いてないもん」

座って琴弾いて、それをオカズ（？）に酒飲むんでしょ？

……やってらんねー。

ぶわあつと煙を吐いて、そんな中心にいる紫を眺めるあたしは、既に、平安京の風流な趣きに飽きていた。

「流石は師匠！流されないんですね！」

「まあ、そうっちゃそうかもだけど」

あたしが言うのもなんだけど、あなた、大丈夫？

仮にも貴族のご子息様が、そんなこと言っちゃってていいのか？

あたしの珍しい思考を知ってか知らずか、ミツチエルは相変わらず感嘆していた。

あーつまらん。

あ、パチンコでも作るか。

「ミツチエル」

「はい？」

「こう……ワイ字になってる枝と、ゴムと小石持ってきて」

「ワイジ？ゴム？」

何もかもにハテナを飛ばすミツチエルにイラつきながらも、取り敢えずわかるように説明するあたし。

すたこらと用意に走ったミツチエルが戻ってきた数分後。

「で、これは一体？」

「こう使うんだよ」

煙管をくわえパチンコを構えるあたし。

標的となった紫の悲鳴が響いたのは、それからすぐのことだった。

「ひいひいっ！敵襲！？敵襲ですか！？」

「者共、出合え！出合えー！」

捕まったのは、ミツチエルだけだった。

リラックス平安京！（前書き）

おげひん注意。

リラックス平安京！

さてさて。

本日もまたすこぶるどっこい真夏日和りな平安京。

あっちい！

あっちんだよ平安京！

お前ら何で平氣の平助みたいな顔でそんな暑っ苦しい着物着ちゃってんの？

平助だから？

あ、助けベエだから？

「……ぶふっ（噴いた）」

やっべ、一人突っ込みやべーうける。

ま、それはそれとして。

只今あたくし、呉服問屋に向かってたりする。

「こまち殿、お出掛けでしたら牛車をご用意しますが？」

侍女だか次女だかがそんなこと言ったけど、あんなおっそろしくのつろい車なんか乗れない。

到着する前に、脱水症状起きるっつの。

さっさか歩いて数十分。

到着した呉服問屋の暖簾をばっさとくぐり抜けたあたしは、

「ヘイユー！シージャック（？）　だ手え挙げる！」

「ひいひい！？」

得物（例のパチンコ）　片手に、颯爽と土足で店主のオヤジんと
こまで上がり込んだ。

こいつらマジバツカでー。（酷）

「い、いいいのちだけはお助けを！」

「タマまでは取りやしねえ、あたい（？）　の言う通りのもん作
りな」

パチンコでタマ取れつかよ。

精々、タマくらいのもん……

「ぶぶつ（噴いた）」

おつといけない。

下ネタに噴いてる場合じゃない。

袖口に突っ込んだ例のブツを取り出して、オヤジの目前にぱらりとかざす。

「こ、これは……！」

「おー流石は天下（？）の呉服問屋。これがどんだけ画期的次世代着物か、一目でわかっちゃったー？」

ようやく得物を下ろしてやれば、オヤジはあたしの見事なデザイン画（ワンピースっぽいのを描いただけの半紙）をしげしげと覗き込んで、しきりにこくこく頷いていた。

「……作りましょう」

「話が早いねオヤジ」

「う、売ってみても……？」

おーなかなか商人じゃん。

「半分とは言わないかな、まあ……30パはあたしに寄越しな」

30パがわからんかったらしく、「え？」みたいに首を傾げたオヤジに、鼻フック食らわせた。（暴拳）

体でわからせたあたしは（無理矢理）出させた茶をしばきなが

ら、鼻歌混じりで、ワンピースの出来上がりを待つことにした。

一時間後。

「さいこーう、リラックス平安京！」

暑っ 苦しい着物を脱ぎ捨て着替えたあたしは、スキップ混じりで紫宅へと帰宅したのだった。

もちろん、

支払いは紫のツケで。

「あの方は一体……」

「店主、例の数学者のこまち殿とかいう方ですよ」

「紫殿のこのか！ て、天才だ！」

「……しーじゃつくって、何だったんですかね」

「さあな……何てったって天才だからな……」

しばらくして。

『りらくす平安京』と名付けられたワンピースが、この呉服問屋から、売り出されることとなる。

ワンピースだったの。

ブルータス、お前もか

「よいですかこまち殿、二度とあのようなことをなさってはなりません」

「……うぜー」

「こまち殿、『うぜえ』とは一体……？」

「『ブルータス、お前もか！』ってこと（適当）」
「ぶるうたす……？」

こないだのパチンコ命中と呉服問屋襲撃以来、いちいちいち紫がうつさいのなんの。
どうやら、ミッチェルがパクられてゲロったらしいけど。

あいつ、根性ないな。

ちなみに、着物はどうも暑苦しくて仕方なかったので、呉服屋に鼻フック決めてワンピースを作らせてやった。

それをあのオヤジが売り出して、今ちよっとしたワンピースブームが、平安京では巻き起こってたりする。

まあ、流石はあたしってことで。

それにしても。

「これだからボンボンはな」

「こまち殿……聞いておりますか？」

パチンコ取り上げくらってから、微妙に軟禁状態だし。

（聞いてない）

「人様をあのような危険物で狙うなど……うんたらかんたら」

まあ、よくよく考えたらあたしは怪しい奴には間違いない訳で。

（やっぱり聞いてない）

「だいたい、坂田のご子息殿と言えば……あーだこーだ」

確かに、紫はあたしによくしてくれてると思っけど。

（もう全く聞いてない）

「顔に墨を飛ばすなど、もってのほかでして……ぴーちくぱーちく」

そっいえば。

紫って『あの』紫式部なのか？

源氏物語の？

マザコンかと思えば、ロリコン疑惑も浮上しちゃってたりするあれ

を書いた？

「……こまち殿、聞いていらっしゃる？」

「紫」

「……何でしょう？」

真剣に紫を見詰めたあたしに、紫が、怪訝な顔で首を傾げる。

博識、上流階級、温厚、無駄に親切（？）。

そんな言葉が、紫には確かに似合うのかもしれないけれど。

取り敢えずは。

「……あんた意外と、アキバ系なんだね」

アキバ系がわからなかったのか、相変わらず首を傾げたままの紫に、続け様にこう言った。

「源氏物語」

「な、なになつ、な、何故それを……！？」

かーっと真っ赤になった紫に、あれまだ公表してなかったのかと確信した。

ふーん……。

「光源氏ねえ……」

「ひいいいいっ！な、内密に！内密になさってくださいませ！」

おたおたと真っ赤なままに慌てる紫は、たぶん、あたしがにやりと笑ったことなど。

絶対、気づいてないんだと思った。

源氏物語か。

どっかに、カーくん（そういう年代）でも登場させてみるかな
！。

「こまち殿！聞いてらっしゃるのですか！？」

「よーうつこっそーここへー」

「こまち殿！あつ、どちらへ！？」

真っ赤になったアキバ系貴族を置いて、懐かしソングを口ずさみながら、あたしはご機嫌でそこを後にした。

ミツチエル脅して、今度はローリースケートだな！

「……ああ……わたくしの源氏物語が危ない……！」
(ちよつと動向を把握しつつある紫)

源氏雌鳥

♪ ♪ ♪ ♪

「はい、ストロップ！そこ、リンダ！テノール外れてるから気をつけて！」

「ソーリー、ミス・こまち！」

今日の数学塾、
皆でゲンジってます。

何か？

帝の誕生会あるとかで？

あたし、知らないうちに出し物（？） 担当になってたらしいから？

ゲンジメドレーをプレゼントフォー帝！

みーたーいーなー？

（数学塾皆で合唱）

ソロで少女AだのBだのを振りつきでもよかったんだけどね。

せつかくだから、紫に敬意を表して的吗？

（もう意味不明）

「ミッチェル！頼んどいたローラースケートはまだ出来ないみたい

「？」

ミッチェルの知り合いに、自称発明家がいるらしい。

だから、ローラースケートをイラストに描いて、そいつに頼んでみたあたし。

まあ、たぶん木製だろうけどね。

「はい、どうやら『ろーらー』部分の制作が難航してるらしくて
「ふーん……。三日以内に仕上げるよう伝えといて。でないとな」
「鼻フックですか!？」

ざわっ。

鼻フックにざわめく一同。

(彼等にはかなり衝撃だったらしい)

「プラスで千年殺し (ナ ト参照) もやるつつつといて」
「せ、千年殺し!？」

ニューな技の登場に、またもざわめく貴族ご子息ご一行。

お前らほんとに貴族か。

メンタル的に弱過ぎる奴等に、少しだけ、平安京の未来を憂いた。

（余計なお世話）

「ほらほら、練習やるよ！そこ、カーくん役のあんた！フォーメーション崩さないで！」

ぱんぱんつと手を叩いて、あたしはまた、練習に熱意を注いだ。

「ああ、こまち殿は今度は何を……」

「どうやら、帝の誕生会で出し物をやるそうですよ」

「出し物！？わたくしは聞いていませんよ！？」

「はあ……なんでも紫様に敬意を表して、『ゲンジメドレー』とかをおやりになるそうで……」

「源氏雌鳥（めんどり）　！！……」

「いえ、『ゲンジメドレー』です、紫様」

「源氏雌鳥……わたくし、不安です……」

紫がお付きの者とそんな会話をしながら、不安げに見ていたことなんて。

あたしはもちろん、全くもって、知ったこっちゃなかった。

「ああ……不安ですわ……」

帝の誕生会まで、後一週間。

あいつもこいつもドイツ人

帝生誕式典当日。

会場内は和やかながらも厳かに、
琴の音色が雅やかに流れる中、
風に和歌が詠み交わされ……

て、いる訳ではなかった。

「皆ーノッてるかーい!?!」

「イエ————イッ!?!?!?!?!」

「Hey!」

「Hey!」

「Hey!」

「Hey!」

「Hey!」

「Hey!」

「Hey!」

「Hey!」

「Hey————y!」

♪あいつもこいつもドイツ人ー
おいらーをー

狙っているんだよー♪

若干の間違った歌詞に乗せて、平安天国（改訂版）がノリノリで流れる。

いいね、あいつらわかってんね！

掴んでる！

アイドルが何たるかを掴んでるよ！

只今、出し物真っ最中。

平安天国を歌うは、我が数学塾に通うボンクラ共のオヤジ達。

（こまちに感化された）

あーおっかしー。

こいつらマジ、ノータリンでしょ。

そんなことを思っただけで大爆笑してれば、いつの間に来たのか、ミツチエルが隣で鼻息を荒くしていた。

「流石ですね、師匠！」

「そーお？」

「はいっ、こんなに盛り上がった生誕式典は初めてですよ！」

そりゃまあね、平安だしね。

まさか、懐かしアイドルソングでうちわ片手に盛り上がるとは、誰も思わんな。

どうでもいいけど、この空気で誰かしら帝を祝ったりしてんの？

……絶対ないだろ。

「で、帝とやらは？」

「はいっ、あそこに！」

ミツチエルが指差した先。

「イエ——！！大臣サイコー！！！！！！！！」

最前列で踊り狂うノリノリな帝と、

「あああああつ、帝、そのような真似はおやめください！」

縋るように泣きながら頼み込む、けど、頭には『LOVE 偶像』と書かれたはちまきをほぼ強制的に巻かされた紫が、そこにはいた。

「『乱れゆく この世を憂いて バ力を見る』」

「おおつ、和歌ですか師匠！」

「うーん……標語？」

「標語かあ！やっぱり師匠は一味違いますね！」

バカを見てんのはお前もな。

そうは口にしなかった。

黒子そのいちでしょ。

「ど、ときどきする俺」

「ばか、これからだぞ！」

「そうか、そ、そうだよな！」

「大丈夫！帝は今『平安天国』でノリにノッてる筈だ！」

ざわざわと落ち着きのないここは、特設ステージ裏舞台。

肝っ玉のちっちええボンクラ達は、お披露目直前で縮こまりまくり。

「あそこが？……ぷっ」

くだんない下ネタに、一人で思わず噴き出した。

やべ、今のちよっとおもろ過ぎる。

（別にそこまでじゃない）

「師匠！ろーらーすけーと準備万端です！」

「おーし、オケオケーイ」

何とか間に合ったローラースケート（もどき）を皆に配り終わったミツチエルが、妙に華麗なローラーさばきであたしに駆け寄る。

お前、密かに練習したな。

「おーし皆の者！これからはあんた達が花形だ！巨人の星に負けな
いくらい、ホームランかつ飛ばして輝いてこいよ！」
「うおおおお！」

すでにゲンジとは程遠い雄叫びが上がったとき、ステージの照明が
落とされた。

（蠟燭が消されただけ）

『……………♪♪♪』

「きゃああああつ！」

敢えてスローなテンポで始まる触れたら割れちゃうの十代ソングに
合わせ、一つ、二つと灯っていく明かりと共に。

何故か上がった黄色い声と。

ぱあんっ。

ぱん、ぱあんっ。

「……………花火まで上げますか」

「ふふん、あたしをナメてもらっちゃあ困るよ、君」

上がった花火（紫のツケ）に感嘆した裏方に、鼻を鳴らして胸

を張るあたし。

ぐーるぐーるとステージを暴れまくるとんちんかなボンクラ共を嘲笑いながら（酷い）、悪代官さながらに高笑いをしてやった。

「一番の功労者はあたし！一番輝いてるのもあたし！」

「なかなかの悪ですのう」

「ふ、そこんところわかつちゃってるあんたもね」

奴等の晴舞台そっちのけで密かに黒子と絆するあたし。

「あ、ミツチエルが転んだ」

「ひひひひ！坂田のご息様が、は、鼻血を……！」

最前列でうちわを振らされていた紫が叫んだと同時に、こつちを見てからまた叫びだす。

うつせえ女だな、マジで。

（とにかく酷い）

「あひひひひ！こまち殿、どなたと肩を組んでらっしゃるかわかっておりますか！？」

「はー？黒子そのいちでしょ？」

だつてこいつ、黒子のカツコしてるし。

とか、あはあはミツチェルの無様さに笑いつつ返したら。

「その御方は、帝のお付き頭の方ですよ！」

「あ、初めましてこまち殿」

「あ、そうなん？ちーッス」

「軽っ、軽過ぎですよ！」

紫が泡噴くんじゃねえかってくらいに、大憤慨してるのにまた大爆笑して。

「帝もきつと、今回の生誕式典に大満足なことでしょう。どうですかこまち殿、今度、帝とお会いになられては？」

「マジでーいいよー」

うやむやに終わった生誕式典を足掛かりに、あたしはどうやら、大船にうっかり乗っかってたりした。

あたし、マジやるじゃん！

突撃！隣の晩ご飯的な。

落ち着きがあつて、ついでに趣もあるだろうだつ広い庭園。
そこを囲うように敷かれた長い長い廊下。

行き交う侍女達のくすくすと耳を擦る笑い声。
と、しゃっしゃっとな廊下を擦る着物の裾の音。

……布、悪くなるよ。

…

……

……つつつつつまんねえ——！

何ここ、何よここ！？

こんなところに帝つてのは住んでんの！？

マジで！？

マジつまんねえここに住んでんなおい！

てかさ、帝の部屋に着くまでどんだけ掛かんのさ。
悠に十分は歩かされてんだけど。

しかも禁煙かよ。

来なきやよかった。

（そこが大事）

「ねー黒子、まだー？」

「おや、こまち殿のお気に召しませんでしたか？」

どこら辺があたくしのお気に召しますかね。

こんなに出入口から遠かったら、すっかり醤油買い忘れたときかどうかすんの。

また行くのとか、超めんどいじゃん。

（帝がどんなもんかよく理解してない）

帝生誕式典と銘打ったただのゲンジライブの後日。

黒子に気に入られたらしいあたしは、突撃 帝のご自宅訪問を敢行していた。

もちろん紫は発狂に近いくらいに猛反対したから、侍女を買収して、薬で眠らせてきたけど。

（暴挙）

たかが帝でしょー？

どうせ、政治仕切ってんのは、右だか左だかの大臣とかなんでしょー？

あ、もち牛の車は辞退しましたさ。
あんなに乗れねっつの。

「こんなとこ楽しいかねー？」

菓子職人に（無理矢理） 作らせた金平糖を貪りながら黒子に聞けば、お上品に、くすくすと笑われた。

お前は女か。

「楽しいかと聞かれたなら、難しいかもしれないですね」

「だーしょー？」

「だからこそ、帝はあなたをお呼びになったのだと思いますよ」
「はあ……」

もう帰って、ミツチエルで遊びたいんだけども。

ぼりんぼりんと金平糖を食いつつ、ようやく辿り着いたらしい帝の部屋。

「……やべ、超気が合うかも shouldn't」

「それはよかったです」

簾子の掛かったそこには、

『ウェルカム！ミス こまち』

と、きつたない字で書かれた垂れ幕が、堂々と下げられていた。

くす玉と一緒に。

「ではこれを」

手渡されたのは三角帽子。

先っぽに、ご丁寧にふさふさまで付いてる。

「……誰の差し金？」

「りさあちってやつです。坂田のご子息殿……ああ、ミツチエル殿でしたか。あの方に協力いただきまして」

ミツチエル、立身出世を計ったな。

薄汚い政治の裏側を垣間見た気がした。

渡された三角帽子をかぶって、くす玉を引っ張って見たなら、ぽんと軽い音がして

「ジャ、ジャ——ン！」

「おおおおっ！」

何とびっくり、

忍者が出てきた。

ごめん、紫。

しばらく帰らないかも。

忍者はニンジャでジャーズでしょ。

流石にちよっぴり度肝を抜かれたあたし。
満足げにうんうんと頷いちゃってる黒子。

（別に今は黒子じゃない）

と、体操のお兄さんさながらに姿勢よく両手を高々と上げて登場ま
しました忍者。

忍者……

ニンジャ……

NINJA……

「……あんたもジャーズ繋がりが！」

「じゃー。いず？」

知らないのも無理はない。

忍者が一世を風靡したのは瞬きよりも儚い一瞬だったし、ゲンジが
解散して、気づいたら忍者も解散してたっていうね。

てか、忍者っていうだけあって、何故か体操のお兄さんみたいな役
どころのメンバーがいたりしてね。

あたしも、うる覚えだけでも。

「あんたもさ、今度、紫に頼んだらいいよ。『ぜひ出演よろしくん

びなーと』って」

「こんびなーと……？」

「まあ、コンビナートじゃなくて昆布でもいいけど」

「昆布は存じていますかな！」

「いますかな？」

頭に頭巾、口布までしてるけど、たぶん、イケちゃってるメンズな部類？（予想）　なこの忍者。

どうも、口調がおかしげだった。

……ネジ、飛んじゃってる系？

（人のこと言えない）

「如何です？帝とわたしの歓迎の計らいは。お気に召されましたか？」

「やーばいよ。掴んでる、掴んでるよ黒子！」

飛んじゃっててもいい！

ばっちし掴まれた！

忍者はマジシャンだね！　（違う）

「拙者、帝にお仕えしている忍びの丞太郎（じやうたろう）と申しますがな！」

「……丞太郎？」

体操のお兄さんでしょ？

（違う）

似合わない。

丞太郎って感じじゃない。

忍者はニンジャでジャ。ーズでしょ。

ジャ。ーズで忍者が丞太郎？

丞太郎だって？

ふざけちゃいけないな忍者！

「あんだ、ファン獲得の意志があるの！？」

「ふぁん……？」

ファンもわからんか、どうなってんだ平安京！

（自分勝手）

未だ両手を高々と上げたままの忍者をびしっと指差して、隣に黒子にあたしは叫んだ。

「猫耳！猫耳用意！」

「かしこまりました」

かしこまった黒子がぱちんと指を鳴らしたなら、早々と、侍女が猫耳を差し出した。

いや、あたしが言ったんだけども。

「……用意がいいね」

「思いつく限りをご用意させていただいております」

出来るな、黒子。

感心してる場合じゃない。

あたしには今、新たな使命が生まれている！

「あんたはね、丞太郎で留まってるいい人物じゃあない！あんたは……」

「せ、拙者は……？」

どきわくな期待を込めてあたしに視線を投げた忍者に、受け取った猫耳をびしっと装着して言い放った。

「マリーちゃんよ！」

「ま、マリーちゃん……！」

こうして。

また一人、ゲンジに次ぐ、新たなスターが誕生しようとしていた。

あ、まだ帝に会ってねえわ。

黒はリリーで紫は帝で

何だかんだでわいわいやって既に一時間。

「うっかりしてましたがこまち殿、帝がお待ちです」
「あんたも大概うっかりだね」

あたしもちらっと思っただけども。
てかもう、面倒くさいからこのまま帰宅でもいいけども。
(もう飽きた)

「そうもいきません。帝が紫になります」
「は？」

紫？

ああ、何だっけか。
紫は高貴な色なんだっけか？
てか、あたしの思考を読むなよ黒子、それも大概、プライベート侵害だよ黒子。

「読んでありません」

「その返答が既に読んでるから」

「それはそうと、」

普通にスルーされた。

ちよつと何こいつ、なかなかのやり手なんだけど！

平安京とかいう大分ふざけたとこに来てから、初めて出会っやり手
なんだけど！

……こういう奴もいるのか！。

基本的に『人はいいいけどノータリン』みたいな奴ばっかかと思って
た。

「では、いざ参られんこまち殿！我が帝にお会いくださいませ！」

すばーん！

と勢いよく引き上げられた御^み廉。

ばばーん！

と平安京の全てを掌握する帝が高笑いと共に登場！

「……何、あれ？」

——しなかった。

「ねえ、何あれ。すーげえへこんでんだけど」

「おや、すでに紫ですね」

ずかずかと乗り込んでいく黒子が、紫のオーラ全開で部屋の隅っこに体育座りを決め込む帝へと向かう。

え、紫ってそういうこと？

何その捻りもへったくれもないみたいな設定。

とか呆れて見ていれば、

「帝、客人ですよ」

すぱ——ん！

は、はたいた！

黒子が帝を！

帝が黒子に！

はたいた！

はたかれた！

「突っ込み担当なんだね！」

「帝は何と申しますか……極度の構ってちゃんなのでごわす」

マリーちゃんと化した丞太郎が、何故か、そっと涙を拭う。

てか、あんたの語尾、統一性なくね？

しかも何、天下の帝が構ってちゃん？

てかさ、帝って曲がりなりにも帝なわけでしょ。

「……構ってやれば？」

一応、曲がりなりにも（大事なことは二回言う）帝なんだし。

「面倒くさいじゃないっスカー」

ぼりぼりと猫耳の付け根を搔くマリーちゃんには、帝に対する畏怖も尊敬も感じられなかった。

え、どうなってんのよ平安京。

大丈夫なのか平安京！

と思ってる内に、またも黒子にはたかれた帝。
威厳ナシ！

「い、痛いよりリー！」

「リリー？」

「帝はですね、とにかく、先日の生誕式典がお気に召されたようで」

はあ。

ぐずる帝をほっぽってあたしに向かって黒子が言う。

「とにかくこまち殿の感性に感嘆されて、わたしをリリーと呼ぶことにされました」

リリーねー。

黒子なのに百合なのか。

ナイス、ノーネーミングセンス！

「本名は？」

「帝が取り決められたのでリリーです（きっぱり）」

スルーかよ。

ま、いいけども。

「僕、ずうっと待ってたのにさ……皆して外で楽しそうでさ……丞

太郎なんか、何それ？楽しみまくってんじゃん……もう僕、帝やめたい……」

未だのの字を畳に書き続ける帝。

お前、暗いな。

すばーん！

それをまたはたきまくる黒子……もといりりー。

（本名不明）

「帝、拙者はマリーちゃんになりやしたっス！」

どこの田舎者ヤンキーだよ、猫耳マリー。

「ねーもう帰っていいー？」

何なのここ、マジで。

あー煙草吸いてー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7290q/>

紫式部観察日記

2011年7月31日12時00分発行